



著者は2024年より本誌の編集委員を拝命した。実は本誌とのご縁はこれがはじめてではなく、大学院生であった2009年から2014年までの間、編集事務局員として誌面づくりの末席に加えていただいたことがある。したがって今回の委員就任は、著者にとって長い時を経て故郷の駅に降り立ったような感慨があり、査読原稿に向き合うたび、どこか懐かしい土の匂いを嗅いでいるような気がしている。

ただし、故郷の風景は確かに変わっていた。かつての事務局員時代、編集会議は月に一度、東京・本郷三丁目にあった学会本部（現在は御茶ノ水に移転している）に、錚々たる大物編集委員の先生方が一堂に会して開かれていた。会議室には独特の緊張感と印刷された紙の匂いが漂い、末席の院生は背筋を伸ばして議事録をとるのが精一杯であった。それが今や、編集会議は月に一度、平日の夜にWeb上で粛々と開催される。会議室の空気感の代わりに、画面越しの先生方の背後には設定された背景が映り、あの本郷三丁目の地下鉄の階段を上る高揚感もう戻ってこない。

Web会議という発明は、多くの方が実感されているように、地理的・時間的制約をひらりと飛び越え、録音も翻訳も資料共有も指先ひとつで叶えてくれる、まことにありがたい仕組みである。しかしながら、便利さの裏側にはいくつかの問題も顔を覗かせる。なかでも著者が密かに気に掛けているのは、会議の「時刻」である。かつての編集会議は、会議終了が夜の9時をまわるなどということはおおよそ考えられなかった。ところが、多忙を極める先生方全員のスケジュールを擦り合わせると、平日の選択肢は自然と夜

遅くへと押しやられていく。しかも驚くべきことに、その時間帯にもかかわらず、毎回多くの先生方がきちんと出席されるのである。画面の向こうの先生方の今日の夕食は、はたして何時になるのだろうか、と要らぬ心配がふと頭をよぎる。

働き方改革が叫ばれて久しい。Web会議という存在は、この改革にとって強力な味方なのか、それとも巧妙な伏兵なのか、いまだ判じかねている。移動時間が消えたぶん、そのまま自由時間が増えれば万事めでたいのだが、現実には消えた移動時間の隙間に、新しい会議がずりりと滑り込んでくる。そんなことばかり考えてしまうあたり、自分もすっかり現代人になってしまったらしい。思えば医療の現場でも、宿日直、自己研鑽、副業の扱いと、働き方を巡る議論は尽きない。制度は確実に整いつつあるが、「自発的に夜遅くまで働いてしまう人」をどう守るかという問いには、まだ誰も明快な答えを持ち合わせていないようにみえる。

そのような時代の只中で、本誌『精神神経学雑誌』は、夜遅くのWeb会議室にぼんやりと灯る画面の光を頼りに、今号もまた多くの先生方の手によって編まれている。読者の先生方におかれては、どうか可能であれば、本誌を昼の明るい時間にお読みいただきたい。編集後記を深夜にお読みになっている先生がもしいらっしゃれば、僭越ながら一言だけ申し上げたい。——その続きは、明日の朝お読みいただいても、きっと変わりませんよ。

嶽北佳輝